

5 原発作業員からのメッセージ

(1) Aさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

初めまして 私は事故が発生した年の6月から夏まで福島第一原発で働いた長崎県に住む者です。

出発当日、従事するメンバーが集められました。皆何の知識もなく、他の人達がどんな人柄かなどわからず全てが手探りの状況で、尚更不安が増したの言うまでもありません。

出勤のチェック、その日の体調のチェック、当日自分が配属される班、場所、作業内容などチェック内容が三重にも四重にもあります。

ミスが積み重なると「使えない人間」として判断されていきます。

放射能を浴びる危険な仕事ですから中間業社としては順応出来ない人間は従事させません。

高線量を浴びる作業に順応出来ない作業員が比較的安全な低線量の作業を終え、ポツリと「今日は暑かったとか苦しかった」とか言おうものなら「仕事もできないくせに！じゃあ線量浴びてこいよ！」などフラストレーションのはけ口が一斉にその人間に向かいます。

それは放射能の作業に従事する恐怖が心の奥底にあり、良い人も悪くなっていきます。

私は初日で自覚しました。誰かが優しく教えてくれる、そんな訳はありません。ここは戦場なんです。それぞれの人が自分の事で精一杯で人に気使ったりする余裕はないんです。

3月当初からいる古参の作業員の方に言われました。「自分の身は自分で守れ。ここは全て自己責任だから。助けてあげたくても作業に入ったら無理だから」冷たいようですがその言葉を自分自身後々痛感していく事になります。

私は高線量地域でも働き、上下の下着、タイベック二枚、綿手、頭巾、ゴム手三枚、軍足三枚、足カバー、フルマスクの装備。

最初の頃はマスクの装着が甘くて空気が入り曇ってしまい前が見えなくなったり、内部被爆をする事を恐れ、逆にきつきつに絞めすぎて頭が痛くなったり鼻が痛くなる位絞めすぎたり。

季節は夏で気温 30 度以上。アノラックというカップの装備の場合は最悪です。正直暑さで死ねます。敷地内に入るとトイレもままなりません。

そして、してはいけない事、覚えなければいけない事は山積み。未知なるものというか目に見えない被爆への恐怖。

そして一番求められるもの「早く！」「早く！」「早く！」そこにいればいるだけ多かれ少なかれ放射能を浴びてしまう実情。

最悪です。何度も繰り返しますが本当に嫌なくらい原発事故の恐ろしさ、収束の大変さを事あるごとに感じさせられます。

これほどきつい仕事をしたのに、私は約束通りの賃金をもらえず、危険手当も全てピンはねされてしまいました。賃金は1日1万1千円でした。

私は福島原発で働いたからといって大きな金額を望んでいるわけではありませんでしたが、今回のような扱いを受けてあまりにも情がないと感じました。

泣き言にはなりますが自分にも家族がおり子供も3人います。

月々の家族の生活費、車の重量税、厳しい時に助けて貰った友人への返済稼がなければなりませんでしたし充てにしていました。

だからこそ尚更、悔しいし納得出来ないのです。